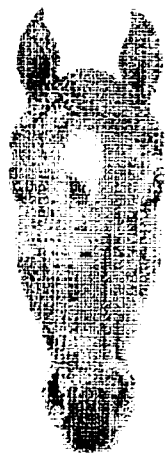


'94(第35回) 科学技術週間 特集号

## 御崎馬と 馬の文化



### もくじ

御崎馬と日向の馬文化

加世田 雄時朗 …… 2

馬 あ・ら・か・る・と …… 14

馬の本 …… 19

馬の博物館(横浜市) …… 20

”うまの館”

御崎馬のふるさと

都井岬(串間市) …… 21

農業博物館見学のたより …… 22

農業博物館だより

(平成6年・1994) …… 23

### 科学技術週間特別展

平成6年4月18日(月)～24日(日)

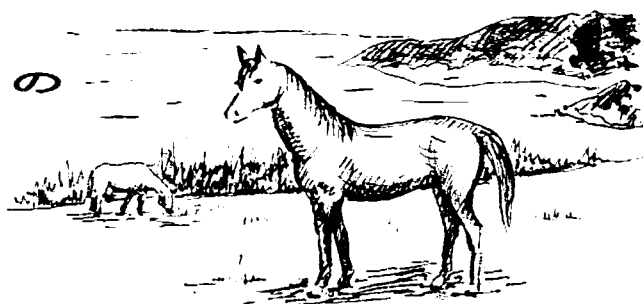
9時～16時

”馬”の展示は1年間続けます

入場無料

感動！ 科学の心

# 「御崎馬」と 日向（宮崎）の 馬文化

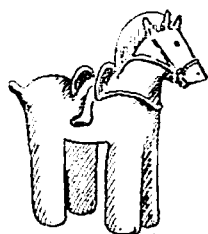


獣医学科 加世田雄時朗

古代から日向の国が馬の産地であった。そのことは、古墳時代（5～6世紀）の遺跡の埋蔵品の中に馬の装飾に使われたと考えられるものが多く発見されていること、そして馬の生産のための牧も数多く設けられていたことが日本書紀や続日本紀などに記録されていることから明かである。

7世紀初めに編纂された日本書紀には、推古天皇が「馬ならば日向の駒」と歌われたことや、日向の国は駿馬を意味する「千里の馬」を出すと記されている。さらに、8世紀末に編纂された続日本紀にも、日向の青馬が朝廷に献上されたことが記録されている。これらはいずれも当時の日向の国が名馬の産地であったこと示している。日向の国が馬の産地になった理由について明確に解答する文献は発見されていないが、馬を繁殖・育成するには、温暖多雨で青草が豊富であることや馬を放牧できるような広い土地が必要であることなど、いわゆる「牧」の条件を満たす必要がある。恐らく日向の国はこれらの「牧」の条件を満たす土地が豊富にあったのであろう。

藩政時代にも、日向の各藩は馬牧の経営に熱心で、延岡藩、佐土原藩、飫肥藩、都城島津氏の各藩は、それぞれの藩内に馬牧を設け馬産に励んだ。高鍋藩も当初から岩山牧（現在の都農）と市ノ山牧（現在の高鍋町上江）を設け、また飛領である福島地方（現在の串間市）に7つの牧を経営した。その1つが現在の都井岬の御崎牧である。



日向の国（宮崎県）の明治以前の馬の飼養頭数は不明である。その後、明治10年頃に8万頭、大正元年に7万頭、昭和元年に6万頭、昭和24～28年に4万頭と記録されている。このように長

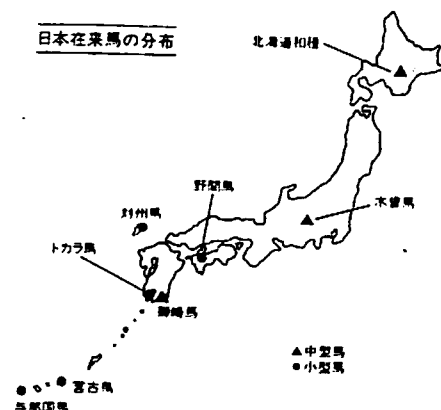
い歴史を持つ日向の馬も、明治39年から実施された外国種による大型化改良事業によって、ことごとく雑種化されてしまった。さらに昭和30年代以降の農業や運搬業における機械化にともなって馬そのものが姿を消してしまった。

ここでは、2000年に及ぶ歴史を持つ日向馬の現存する最後の末裔、御崎馬を通して日向の馬文化を検証してみることにする。

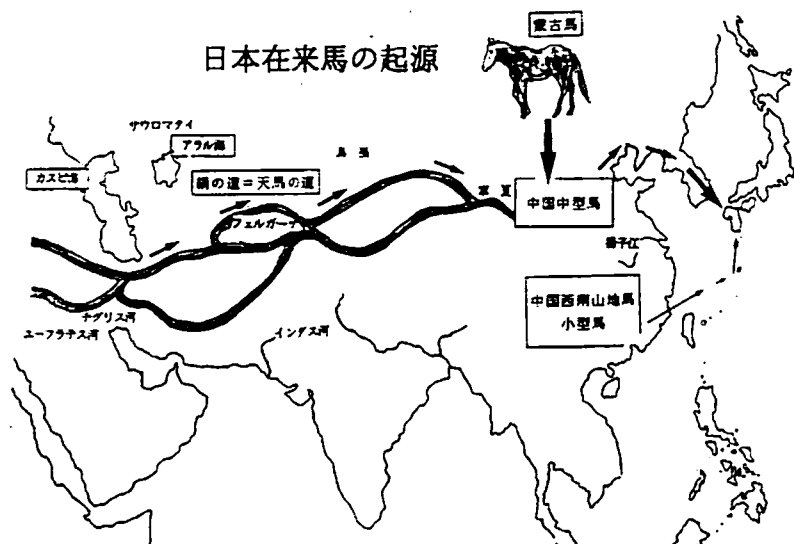
### 日本古来の馬（日本在来馬）のルーツ

現存する日本古来の馬は、北から北海道和種馬、木曾馬、御崎馬、対州馬、野間馬、トカラ馬、宮古馬及び与那国馬の8つの馬種である。これら日本古来の馬の起源については長い間議論されてきた。それは日本書紀や古事記の神代の代に馬が登場し、近年になっては騎馬民族説が唱えられるなど日本の古代文化と馬の間には密接な関係があるからであろう。

この日本在来馬の起源に関する最も説得力のある”林田説”は次のようなものである。すなわち、前述の8馬種をその体格からみると、北海道和種馬、木曾馬及び御崎馬の3馬種は、いずれもその体高がほぼ130cmの中型馬で、主に日本本土に分布している。これに対して、残りの4馬種はいずれもその体高が100cm前後の小型馬で、その主な分布域は南西の孤島である。一方、中国大陸では中部以北には中型馬（蒙古馬や蒙古馬と中国西方化ら北馬との交雑種の蒙古系馬）が分布し、西南地域には小型馬（四川馬や果下馬）が分布している。このような馬の解剖学的特徴と地理的分布状況並びに馬の遺骨の考古学的調査結果を総合的に分析して、「小型馬は縄文時代に中国南部から琉球列島を經由して移入され、中型馬は弥生時代に中国北部から朝鮮半島を經由して移入された。」という林田学説がうまれた。しかし、極く最近の日本在来馬に関する血液学的、遺伝学的調査では、小型馬と中型馬が全く別の系統の馬であるという証明できなかった。従って現在のところ、小型馬と中型馬は同じ系統の馬であり、日本に現存する8馬種はすべて同じ系統の馬とされている。このようにその起源や移



入ルートに不明な点もあるが、日本在来馬が縄文時代から古墳時代にかけて中国大陸から移入されたことは間違いないであろう。それは日本古代の馬文化に関して中国や朝鮮と共通点が多いことから明かである。それだけでなく、御崎馬を初め、ほとんどの日本在来馬には、未改良馬の特徴的な毛色と言われる河原毛や鰻線（背中黒い線）がしばしば観察される。また馬が速歩で動く時に、同側の前後肢を同時に前後に動かす側対歩と呼ばれる独特の歩様などが良く観察される。これらの毛色や歩様の特徴が中国大陸の蒙古馬や蒙古系馬と共通していることも、日本在来馬が中国大陸から移入されたという学説の根拠になっている。



### 御崎馬の歴史

御崎牧場は、1697年（元禄10年）8月、高鍋藩秋月家によって創設された。当時秋月家では今日の串間市内、福島、本城、大東、市木及び都井の各町村に7ヶ所の藩営牧場を設置し、軍馬や農耕馬の生産に行った。この7牧の1つ都井村御崎牧が今日の”御崎牧場”である。その当時、藩直営の牧場は牧奉行が統括し、現地に駐在する牧別当と牧方（牧廻り）が牧場の管理に当たった。

御崎牧は人里離れた岬に作られていたこともあって、その管理は極めて粗法で、牧場内には簡単な危険防止柵や壕を設置し、野犬から馬を保護したり、馬が牧場から脱走しないように警戒する以外、ほとんど人為管理は行なわれなかった。馬は周年放牧され、人手が加わるのは、毎年秋に行なわれる駒追いとかが駒取りと言われる行事の時だけであった。この時は、藩主や郡代が牧奉行と共

に牧場に出向き、庄屋の指揮の下に全村民が参加して、馬を山や谷から追い出して1ヶ所に集めて全馬の検査を行い、2歳以下の子馬のうち雌子馬はすべて繁殖用として牧場に戻した。雄子馬のうちの1部は種馬候補として成雌馬と共に牧場に放し、その他の雄子馬は、藩用の上馬以外は全て農耕馬や荷役馬として農民に払い下げられた。

御崎牧場は、明治維新以降は明治政府の管財になったが、明治7年都井と宮の浦を一団とした御崎牧組合に払い下げられた。しかし、その後も馬の管理は藩政時代と同様に粗法な周年放牧であった。

御崎馬の頭数については、明治以前の御崎牧場の飼養頭数の記録がないので不明であるが、組合の所有になった明治7年から昭和13年頃までの期間は130-150頭で推移していた。しかし、太平洋戦争中から戦後にかけて急減した。昭和28年には(1)自然環境における特有の動物、(2)日本に特有の畜養動物として国の天然記念物に指定された。しかし、その当時から急激に進んだ農業や運搬事業の機械化に伴い、御崎馬の用途はほとんどなくなった。その結果馬の頭数は急速に減少し、昭和40年頃には50頭をも下回り、滅亡の恐れさえ出てきた。そこで、昭和42年から国、県、市及び御崎牧組合が一体となって保護増殖に勤めた。その結果、昭和60年以降は100頭前後にまで回復した。

## 日向牧の歴史

古来、日向の国が馬の産地であったことは前述の通りである。康保4年(967)発布された延喜式には、朝廷の官牧として3ヶ所の馬牧(都濃野、野波野、堤野)の他に同時に牛牧も野波野(野尻町)、長野(北郷村)、三原野(不明)の3ヶ所に設置された。

これは、これ以前から日向の国が牛馬生産のために、牧に適した場所として認められていたことを示すものである。ここで「牧」というのは、馬を放牧して飼養する所であるから、馬を



放牧できるだけの面積とその馬の餌となる草が十分にある土地が必要である。当時の日向の国には、このような場所が豊富に点在していたのであろう。南九州の東に面した日向の国は、1年中温暖で雨量も多く馬の餌となる草が豊富であったので、牧を作るのに適当な未開墾地が多かった。そのため、1年中放牧でき、しかも人手をかけなくても馬の生産ができた。

延喜式で設置された馬牧のその後の経緯は不明であるが、鎌倉時代に、幕府が軍備増強のために、日向の清武や大隅の鹿屋に馬牧を設け、軍馬を飼育したという史実が飢肥藩の古文書に記録されている。また日南市平山の駒宮神社には、「神武天皇は宮崎に向かわれる時に、ご愛用になった龍石という駿馬を放された。この牧を龍石の牧と称し、これが日本最初の牧である」という伝説が残っている。神武天皇についての伝説の真偽のほどは不明であるが、龍石の牧（後の立石の牧）は飢肥藩の馬牧として、飢肥馬の生産が行なわれた。飢肥藩は、このほかに大島牧、瀬平の牧、瀧ヶ平牧を設けた。延岡藩は幡浦牧と庵川牧、都城島津氏は梶山、横市、安永、西岳に馬牧、佐土原藩は長園牧と新田牧をそれぞれ設けた。高鍋藩は岩山牧（この牧は延喜式で設置された都濃野馬牧の後身）と市ノ山牧の他に、飛領の福島地方に7つの牧を設け、馬産に動めた。このように古くは朝廷や幕府、藩政時代には各藩によって数多くの官牧が経営された。この官牧のほかに、一般の農民が経営する里牧（百姓牧または私牧とも呼ばれた）や農民救済の目的で救牧が設けられていた。このような長い歴史を持つ数々の日向の馬牧も、農耕馬や荷役馬の消滅と共に無くなった。その中であって都井岬の御崎牧場だけは、往年の馬牧の姿を今日に伝えている。

### 馬の飼育と利用

昭和30年代から農業が急速に機械化され、それまで主役であった馬は急減してしまった。しかし、機械化される以前の農業においては、馬は極めて重要な労働力であり、大概の農家では1、2頭の馬を飼っており、毎朝夜明けと共に起きて近所の河川敷や田圃のあぜあるいは近くの山の草刈り場から青草を切って来て与えた。夕方には、朝切ってきた草にわらや乾草を切って混ぜて食わせた。季節によっては芋づるや大根葉など色々なものを与えた。この朝飼いと夕飼いのほかに、毎日の運動が必要であった。農繁期になると、田圃や畑の鋤

返しや堆肥の運搬、それに続いて、田植え前の代掻きと毎日激しい労働が続くので、日頃とは違った特別の栄養食を与えた。大豆や麦などの穀類や唐芋の外に、もち米等の特別食も与えた。都城下長飯では、馬専用の味噌をつき、鯛を味噌汁にして飲ませて元気を付けた。また、仕事が一段落すると、「馬作り」といって、耕耘中に痛めた体や四肢の怪我を治療したり、蹄などの手入れを欠かすことはなかった。このように馬は農耕のための労働力として欠かすことのできない存在であったが、同時に、現金収入のほとんどない当時の農家にとっては、自分の馬に子を生まれせ、育てて競り市で売ることが、大事な現金収入を得る手段でもあった。従って、「馬産の間で子を生まれせ」と言われるほど忙しいところもあった。田植えも終わり畑仕事が一段落すると、農家によっては駄賃取りとか駄賃付けといっって自分の馬を使って木炭や製材あるいは俵物を運んで、現金収入を得た。「申間馬」は御崎馬の血を引いており、体は小さかったが、蹄が堅く、まっすぐに立っているために、狭い山道や田圃のあぜ道でも器用に歩くことができた。また木炭や製材の駄載に適した「だくあし」と呼ばれる歩き方もできた。その上粗食に強く忍耐力があったので、その特徴を活かして、農耕や駄載に利用されていた。山奥で切った木材を引きだす「山出し」の仕事や山から切りだされるべんこう材や砂利を宮崎や内海の港まで運ぶ荷馬車荷にも馬は利用されていた。

戦後、日本の農業の復興は目覚ましく、馬の頭数も急速に増加した。しかし、農業や運送業の機械化とともに、それまで農業の中心的存在であった農耕馬が急激に減少し、昭和46年には県の統計からも消えてしまった。

### 馬の売買（伯楽・馬喰・家畜商）

藩政時代の高鍋藩の「牛馬方目安」という記録をみると、「伯楽の許可を受けたものでなければ、牛馬の売買はできない」と定められている。この伯楽はもともとは中国の古人の名前で、その人は馬の鑑定に大変長じていたので、後に相馬（馬の鑑定）に長じた人を伯楽と呼ぶようになった。馬産が大いに進んだ鎌倉時代以降、戦場で怪我や病気をする馬も多くなった。当時の武将には専任の馬医がいてその馬の治療に従事したが、戦場のような緊急事には、馬の取扱に習熟したものがその治療に携わった。これが「伯楽」の馬の治療の始まり

である。しかし本来伯楽は馬の善し悪しの鑑定にも優れていたもので、馬（後には牛も含めて）の売買に専念する人も多かった。一般には、この売買に専念する人を博勞（ハクラクがなまったのかも知れない）と呼んで、馬の治療をする伯楽と区別していた。

牛馬の売買は、”市”で行なわれるのが普通であったが、中には農家の庭先でも取引された。そのため「庭先馬喰」とも呼ばれた。顔馴染みの庭先馬喰が来ると、農家の中には、自分の馬に関する情報を教えたり、手伝って小使銭を稼ぐ人もいた。このような人は、「はさん馬喰」（高千穂町）とか「はさん人」（西郷村）あるいは「かまさし」（都城、田野）などと呼ばれていた。

昔は子牛や子馬が生まれると、”市”から遠い農家は夜中立ちして親馬も一緒につれて出かけた。”市”には方々から大勢の「馬喰」が来ていて、馬の親子をともに詳しく調べて自分の

希望の馬を競り落としていった。串間市本町で行なわれていた競り市や都井岬の中牧には、飢肥の板谷や目井津から大勢の「馬喰」が買いに来て、県内はもちろん大分や鹿児島方面まで売られていった。各地の「馬喰」によってこの馬は丈夫だとか、使いやすいといっ



た評価が下され、これが地元はもちろん遠く県外まで宣伝された。こうして「馬喰」は馬の流通を円滑にし、馬の能力の向上にも貢献した。戦後特に昭和30年代以降の農業の変化や畜産の急速な発展の中で、馬喰も家畜全般を取り扱うようになりその名称も「家畜商」に変わった。

### 馬に関する信仰

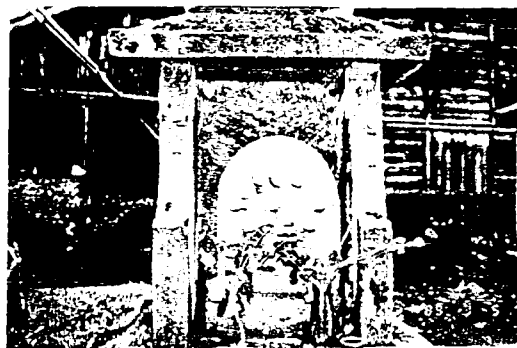
昔は馬は農耕や運搬に欠かすことのできない家畜であり、馬のいない農家は働かない農家として軽べつされるほど、どの農家にも1、2頭の馬がいた。忙しくなる前には特別食を与えて栄養を付けてやり、仕事は終わると十分な手入れをしてやった。これは馬が家の重要な財産であるばかりでなく家族の一員と



して「所帯柱」と言われるほどに大事なものであったからである。そのため日頃から馬の安全と健康を祈り、病気になればその回復を神に願い、死亡すれば丁重に埋葬し、供養塔や供養塚を立てたり、供養松を植えた。また馬頭観音や早馬神社を建立して馬の安全や無病息災を祈った。そのため県内の各市町村ごとに、さらに各地区ごとにそれぞれ特有の馬に関する信仰や行事があった。これらの中には現在も続けられているものがある。

**馬頭観音祭** 昔はの各地区の路傍に馬頭観音の石像があった。建立の時期は江戸時代から昭和まであり、建立者も地区民や畜産組合あるいは豪農であった。飼育していた馬が病死した時には、その供養のために「馬頭観音像」を建てた。毎年決まった時期に村人はこの像の前に集まりお神酒を奉納し、神事後、馬の安全と無病息災を祈願し、せんぐをまき境内で直会の行事をした。

**神馬の行事** 毎年催される清武町の船引神社の秋祭りには、地区で生産された雄子馬は飼い主に引かれて船引神社に参拝し、「神馬」の行事が行なわれた。宮司の神事後、集まった雄子馬は頭やたてがみを飾り、飼い主に引かれて神殿と拝殿の周りを3回駆け回る。鼓を打って最高調に達した頃御殿の中から不意に2本の護符が馬の群に向かって投げ込まれる。飼い主達はこれを鼓って拾った。それはこの護符を拾った飼い主の子馬は無病息災で、しかも高値に売れると言われていたからである。宮崎市の金崎神社（俗称権現様）の秋祭りでは、村の対岸に競馬場があり、そこで御神幸が行われた。御神幸の神輿の周りを、上講、中講、下講の3講中から選ばれた3頭の神馬を村の成年達が白装束に身を固め、競走で引き回した。この時に近郷近在から50頭ほどの馬が集まり草競馬が行なわれ祭を盛り上げた。他馬の繁殖、安全、無病息災を祈る神社としては、この他に県内では、田代神社、平山神社、鳴滝神社、猿田彦神社、白髭神社、早馬神社、大將軍神社が有名である。



## 馬にまつわる民俗と伝承行事

昔から馬は農業のみならず、社会全般に深く密接に係わっていたために、県内各地に馬にまつわる数多くの民俗が生まれ、長い間途絶えることなく伝承されて来た。その中には先の大戦時以降一時的に途絶えたが、近年復活し昔日の面影を取り戻してきたものも少なくない。

「馬作り」あるいは「馬つくろい」は、田起こしが始まる前の4月初め、田植えの終わった6月末あるいは正月休みに行われた馬の手入れや治療のことである。同じ地区の5～10戸の農家が集まり、「血出講」とか「チザシグミ」と呼ばれる”講”を作り、「血出原」とか「馬寝せ場」と呼ばれる一定の場所に牛や馬を連れて集まり、馬の手入れをしたり伯楽に馬の治療をして貰った。この当時は、現在の獣医のように高度の獣医知識や薬剤、治療器具などがほとんどなかったため、治療もかなり粗末なものであった。

馬の治療法には、「馬焼き」と言っても、真っ赤に焼いた鉄こてで口蓋や皮膚を焼く治療法（現在では滅多に使われなくなったが「焼絡」と言われるれっきとした獣医の治療法の1つ）や「針刺し」とか「血出し」と呼ばれる肩や尻の皮膚に三角針を刺して血を出して治療する治療法があった。「馬作り」が終わると、”講”の構成員が順番で御馳走を作り、集まった全員で馬の安全を祈って宴会をした。「かんだてゆえ」の催しは、昔から馬の産地で知られている真幸、加久藤、飯野など今のえびの地方で、子馬が無事に売れたことを祝って行われた酒宴である。昔は、子馬は重要な現金収入源であった。従って手塩にかけて育てて無事に競り市で売れることは大変な喜びでもあった。そのためその祝いが各地で行なわれていた。競り市が終わるとそれぞれの馬の種付けをした種馬所に集まって、子馬の売上げの一部を出し合って御馳走を作り、子馬が無事に売れたことを祝って酒宴を開いた。

「刈り干し切り唄」は、高千穂地方に伝わる民謡として大変有名である。西臼杵地方は明治の中頃までは馬の飼育が盛んであったが、九州連山に囲まれたこの地方では、田畑が少なかったため馬の飼料はほとんど刈り干し野草であった。山々の中腹のソビラや谷間の迫々に野草の刈り場が開かれていた。そこで飼料用の草だけでなく屋根葺き用の茅も刈った。刈り取った野草や茅は4～5日干して小積みにした。その後、野草や茅の株を馬の背にウセテ（乗せて）、

多い時は4～5頭クサッテ（繋いで）帰った。このような時にいつの頃からか唄われ出したのが「刈り干し切り唄」である。山深い高千穂地方の農家に昔から受け継がれてきた馬にまつわる民俗を生き生きと今日に伝える伝承唄である。

「だくあし」馬は、木炭や製材、俵物を運ぶ駄賃取りとか駄賃付けに使われる駄賃馬としてたいへん重宝がられた。これは一般の馬と違って、左右の揺れはあるが上下の振動が少ないので、荷崩れなども起こらず駄載に大変都合がよかった。そのためわざわざ馬喰に頼んで「だくあし」の訓練をしてもらった。この訓練ことを「いぎきさし」とか「いぎきいれ」と言い、訓練をする馬喰は「いぎきいれどん」と呼ばれた。

「流鏑馬」は、馬に乗って走らせながら鏑矢を放って的に当てる一種の儀式である。昔から多くに神社に馬の守護神が祭っており、神社の大祭の時には神楽や神輿などと共に、「流鏑馬」が催された。宮崎神宮では現在でも「流鏑馬」が行なわれており、神武さまの「やくさみ」と言われる。現在の神事の「流鏑馬」は、昭和15年に小笠原流の古式によって式法が定められた。

「シャンシャン馬道中」は、10月27、28日に行われる宮崎神宮大祭の華である。昔から結婚すると花嫁を馬に乗せて、夫が手綱をとり”鶴戸詣で”をする習わしがあった。鶴戸神宮は旧称を”鶴戸六社権現”と言い、縁結びの神、安産の神としての信仰が生まれ、多くの人々が参詣するようになった。当時は宮崎からは内海峠、内海浦、鶯巣峠、鶯巣浦、伊比井越、伊比井浦、富士浦など7浦7峠を越えて参拝した。一方「シャンシャン馬」の起源について、日南市の駒宮神社として知られる平山神社には、次のような伝承がある。神武天皇が愛馬「龍石」を平山海岸を望む丘に放した。この牧が龍石の牧、後の立石の牧である。この牧で生まれた駒は必ず駒宮神社に参る習わしであった。後に一般の農家もこれにならって秋の大祭には近郷近在の農家から大勢の人が、鈴や飾りを付けた飾り馬を連れて参詣するようになった。その馬が「シャンシャン」と音を響かせて歩いたので、いつの頃からかその馬を「シャンシャン馬」と呼ばれるようになった。

高城町に伝わる「献上馬」は大名行列を模倣したものと言われる。豊臣秀吉の朝鮮出陣の際に、島津義弘や義久公も従軍されることとなり、武勇の神であ



る諏訪神社に武運長久の戦勝祈願をされ、無事凱旋された。そのお礼と報告を兼ねて諏訪神社に参詣し神楽を奉納された。この時の上り下りの道中行列を真似たのが「献上馬」の始まりと伝えられる。一方、高木町の「献上馬」は、江戸に上る島津本家に従う都城島津の若殿様が、島津家安泰と道中無事を

南方神社に祈る祭礼を模したもので、神の乗り物として神聖視された馬を神に献上する「神馬」に、「よりました」と呼ばれる稚児を乗せて行なう「作神送り」の神事である。

「ジャンカン馬踊り」は、昔から都城・北諸県地方に伝わる人馬一体の踊りで、馬の首にたくさんの鈴を懸けているので「鈴かけ馬」とも、馬が踊ると「ジャンカン、ジャンカン」と鈴が鳴るので「ジャンカン馬」と呼ばれている。また「物詣での馬」の意味で「ものめい馬」とも呼ばれる。母智丘神社、雄児石神社、三股町の早馬神社の例祭には毎年奉納される。馬の健康を神前に感謝し、農作物の豊作と農家の繁栄を祈り、馬の安全と無病息災を祈念して行なわれたものである。



県一席になった豊稔忠男さんの「野生馬の誕生」(子馬にはまだ羊膜がついている)  
朝日新聞

驍 モリウ  
つよく  
文馬 ヘウ  
馬の名

驪

良馬の名

駿 ハツ  
馬が走るさま  
驄 キョウ  
馬が走る  
驥 キ  
馬が走る  
驥 キ  
馬が走る



放牧馬の捕獲「牧馬図」より 東京国立博物館蔵

驥 キ  
馬が走る

驥 キ  
馬が走る

驥 キ  
馬が走る

驥 キ  
馬が走る

驥 キ  
馬が走る

驥 キ  
馬が走る

驥 キ  
馬が走る

羸

ろ

驥 キ  
良馬

驥 キ  
馬が走る

驥 キ  
馬が走る

驥 キ  
馬が走る

驥 キ  
馬が走る

驥 キ  
馬が走る

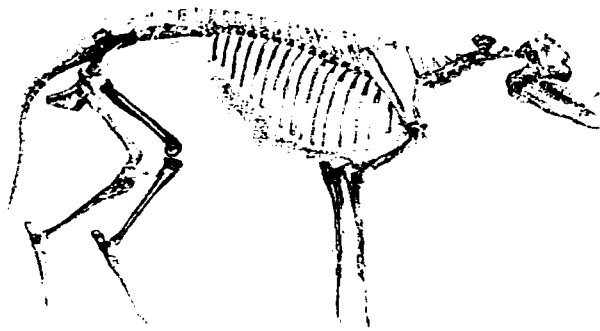
驥 キ  
馬が走る

十四画

馬への歩み \* \* \* \* \*

馬の歴史は、化石を手がかりにその祖先をたどっていきま  
すと、およそ5,000万年前までさかのぼることができます。馬科  
の動物は、森のなかで木の葉を食べていたキツネほどの大き  
さの動物から、平原の草を食べる足の速い馬へと進化してき  
ました。そのみちすじは、非常にたくさんの同類の化石と、  
その化石を含む地層のかさなり具合から明らかにされていま  
す

なお展示の化石資料は、アメリカ自然史博物館で製作された  
複製品です



ヒラコテリウム *Hyracotherium*  
(エオヒップス *Eohippus*)

奇蹄類の動物として最初に現われた馬の祖先ヒラコテリウ  
ムは、体の高さが50cm前後で、前あしに4本、後あしに3  
本の指があり、臼歯は瘤(こぶ)状で柔らかい木の葉や木の  
芽などを好んで食べていたようです

馬

コ  
ン  
獣  
の  
名

駟 騶 駿  
らくだ ヒョク カマ 馬の名 シュウ

馬

(馬の博物館)



遠くの時馬 古墳時  
代に中型馬が日本に  
伝播した。ウマは再  
び軍事的に重要な存  
在となったため、また  
のシムルルとしても  
遠くの時馬が盛んこ  
しくられた。これは  
古墳に用いられた鞍  
のウマの遺骸。たて  
がみを削りそろえ、  
鞍に跨る姿、首の下  
の馬具などで飾りた  
てている。古墳時代の  
作品。群馬県深田  
野原出土。文化庁蔵。  
写真  
群馬県立歴史博物館蔵

世界の馬 \* \* \* \* \*

馬は、およそ5～6千年前から人に飼われはじめ、世界各地の自然とともに人が望む特質をもったものに改良されてきました

現在、馬の品種には、改良種として世界的に知られているものが120種ぐらいあり、これに改良の進んでいない各国の在来種を合わせると、およそ200種ぐらい分布しているといわれています

馬

馬の正名



駿 駿 駿  
カキ シ シ  
まだらうま 馬が疾く走る 馬の疾く走る  
 駿 駿 駿  
カク ホ ホ  
足の白い馬 馬の名 四歳の馬

馬

日本の馬 \* \* \* \* \*

古くからすんでいるわが国の馬は、明治以降、外国から来た馬との混血が進み、今日ではほとんどそのすがたをみる事ができなくなりました

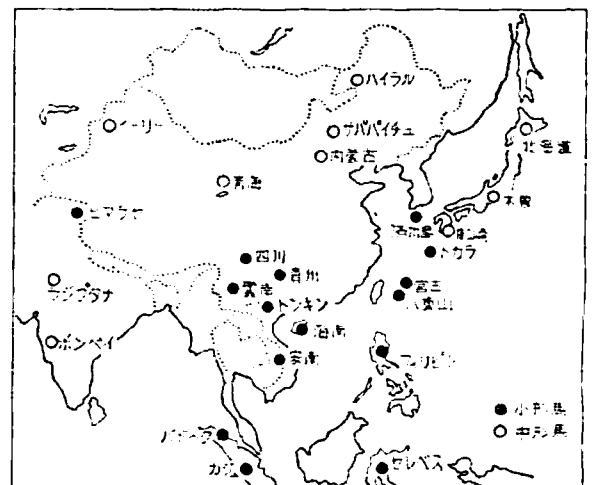
ただ、わが国在来の馬としては、100～120cmほどの小型馬(トカラ馬・宮古馬)と130cm前後の中型馬(北海道和種・木曾馬・御崎馬)が残っているだけです



ピロト登人馬 鹿兒島県

(馬の博物館)

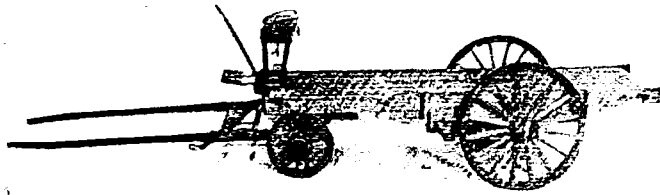
日本および周辺地域の馬



## 馬と産業 \* \* \* \* \*

長い鎖国がとけるとともに、諸外国で高度に発達していた  
 いろいろな馬の利用方法が導入されました。そして、交通  
 ・運輸・農業・郵便・そのほか多くの産業の発展に馬が貢  
 献してくれました

動力機械の発達普及につれて、馬の働く分野は少なくなり  
 ましたが、いまなお坂道の多いまちや山のなかで活躍し  
 ております



乗車式四輪荷馬車（昭和初期）

模型（全長139.5cm）

自動車輸送が現在のように発達するまでは、このような荷  
 馬車が船や鉄道とともに輸送の主役となっていました

### 馬市

中世以降、軍事・農耕・交通などに使われる馬の需要が一  
 段とふえ、各地に馬市が開かれ、馬の取引がさかんにおこ  
 なわれました

## 騷 𩶑 騃

馬の一種  
 コシ  
 チュ  
 馬が進まない  
 スイ  
 馬の小さい

## 駢

馬が走る  
 ホン

## 騶 駟

馬の名  
 ドウ  
 トウ  
 馬の走る

## 騶 駟

まだらうま  
 シュン  
 馬の走る

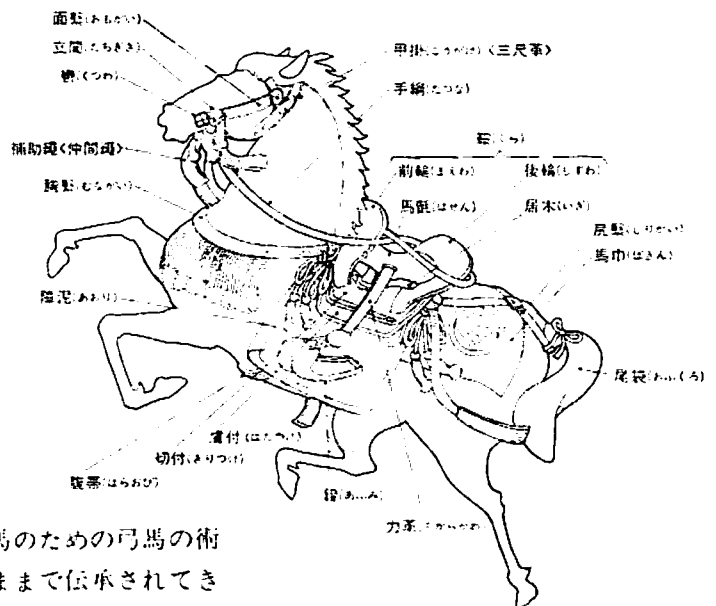
## 九画

## 駟 駟

馬の走る  
 ヘン  
 馬の走る

### いろいろの馬具

#### 馬の装い



## 駢 駢 駢 駢 駢 駢

### 馬術の諸流

武家社会の作法のなかで、古くから乗馬のための弓馬の術  
 がありました。室町時代になって、いままで伝承されてきた  
 馬術を体系化した大坪流がおこりました。  
 その後、江戸時代には大坪流のほか、多くの流派が生まれ、  
 馬術がさかんになりました

(馬の博物館)



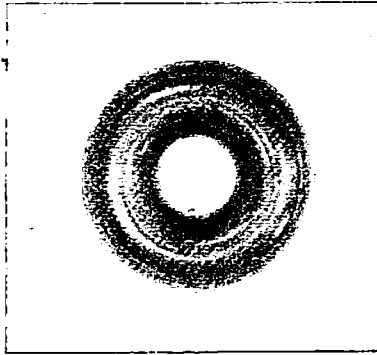
信仰のなかの馬 \* \* \* \* \*

馬は、人と神との仲だちとして、信仰行事に深いつながりをもってきました。そこに多くの人びとが馬に託したさまざまな思いをくみとることができます  
また人びとは、生活をともにする馬に愛情を寄せ、家族と同様にその安全を祈り、育ててきました



繪馬

繪馬は、神々にささげる「生馬」のかわりに、木・土や藁などでかたちづくられたものや、板・紙などに馬を描いたものになったといわれています



馬鈴

使用地 新潟県新発田市  
真鍮 (径7.0cm)

馬頭観音

馬頭観音は、馬力神・馬刀神・蒼前(勝垂)神・馬極神などととも馬の守り神として、広く各地で信仰されています



馬頭観音像

所在地 茨城県稲敷郡美浦村  
石 (68.5×21.0×26.5cm) 模造

馬

くりゆう  
くりげ

騶 騶 馬

ガウ  
まがはる  
トク

騶 驢 驥

リウウ  
リウ

オン  
オン

アン  
まをまをまを

騶 騰 騰

ケイ  
南朝の白馬

トウ  
トウ

トウ  
のける

騶 驕 驄

オウ  
馬の世をま

キウ  
高き尺の馬

キ  
千里の馬

(馬の博物館)

騾  
ウツ  
騾  
ウツ

# 晏

騷  
ウツ

## 近代馬術 \* \* \* \* \*

乗馬の技術は、18世紀に入ってヨーロッパで発展し、わが国には明治時代に伝わり、いちだんと普及しました。その後、オリンピック競技種目として、馬場馬術・大障害飛越・総合馬術の3つがとりあげられ、今日の近代馬術の基礎となりました。

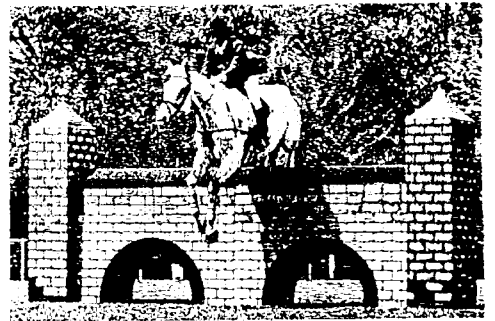
『馬場馬術』  
人馬一体となって優雅な動きを競う競技



『総合馬術』  
馬と人間の体力の限界に挑戦する競技



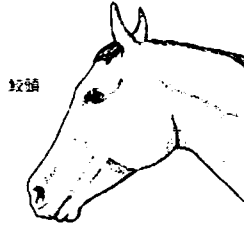
『障害飛越』  
スピードとジャンプのダイナミックな競技



## 日本の競馬 \* \* \* \* \*

日本の競馬は、古代から宮廷・神社などで祭典競馬として行われてきました。

今日のような洋式競馬は、文久元年（1861）に横浜ではじまり、その後、明治時代になると全国各地に競馬場がつけられ、広く行われるようになりました。



騷 騾 騾

めうま シマウ タク  
馬が速いこと

馬

騾 騾 騾 騾 騾

馬の名 良馬の名 良馬の名 良馬の名 良馬の名  
あしけ ソウ  
あしけ ソウ  
あしけ ソウ  
あしけ ソウ  
あしけ ソウ

(馬の博物館)



根岸競馬記念公苑

# 馬の博物館



## 利用案内

根岸競馬記念公苑 入苑無料

開苑時間 午前9時30分～午後5時

馬の博物館

開館時間 ●午前10時～午後4時

休 苑 日 ●毎週月曜日(祝日・振替休日は開苑)

●創立記念日(4月1日)

●12月28日から1月4日まで

入 館 料 大人 100円

小・中・高校生 30円 (特別展示の場合は入館料が  
団体(20名以上) 半額 変わることがあります。)

交 通

●JR・東横線 桜木町駅から市バス①②③系統「滝の上」下車

●JR・東横線 横浜駅東口から市バス④系統「滝の上」下車

●JR・根岸駅から市バス⑤⑥⑦系統桜木町行き「滝の上」下車

お問い合わせ 財団法人 馬事文化財団

〒231 横浜市中区根岸台1-3 ☎045(662)7581



横浜は文明開化の窓口でした。

日本の西洋式競馬の歴史もここで始まっています

この横浜で、慶応・明治・大正・昭和と76年ものあいだ親  
しまれてきた競馬場、それが根岸の競馬場でした

昭和10年代の根岸競馬場。



# “うまの館”

— 御崎馬のふるさと —

串間市都井岬

平成6年春に開館

日向の國  
都井の岬の青潮に  
入りゆく端に  
一人海見る

若山牧水



都井御崎牧組合 といみさきまきくみあい

高鍋藩有地が廃藩置県で国有になったのを機に、1874年(明治7)都井村(現串間市)の庄屋日高弾吉を中心に、宮ノ浦村(現串間市)からも参加して155人の共同経営として払い下げを受けたのがはじまり。当時の出資金は1株30貫で、各人1株以上を所有することとした。しかし出資金が不足し、その分は借り入れて発足した。牧場面積は58町2反3畝25歩(約58ha)で山林のまじった原野であった。雄馬6頭、雌馬117頭で、その年に生まれた子馬を売却して借入金の返済に充て1887年(明治20)に完済した。このあとも共同管理反対や牧場売却論、牧畜舎廃止論などもあり、共同経営の困難が続いたが、1697年(元禄10)開設以来300年近い牧場の歴史の重さと、国指定天然記念物(1953年=昭和28)となり、県観光地としても脚光を浴び、経営困難の中で任意組合ながら共同経営体として存続している。現在の飼育頭数は84頭、株数は創立時の155株が110株に減っている。

現組合長谷村久俊。→ミサキウマ

〈山口常雄〉

都井岬 といみさき

串間市南東部に位置する志布志湾東端の岬。日南海岸国定公園に属する眺望雄大な景勝の地。黒潮が岬の沖を流れ気候温暖、年間降水量2129mm。ソテツの北限自生林である特別天然記念物「都井岬ソテツ自生地」(1952年=昭和27)と、286年間の自然放牧に耐えぬいた天然記念物「岬馬およびその繁殖地」(1953年=昭和28)があり、いずれも国の指定。都井岬は南那珂山に属する高畑山を頂点とする山塊が、半島状に日向灘に突出しているもので、地形は複雑な丘陵状(標高約200m)をなしている。岬は北から南東方向に屈曲し長さ約4km、幅2km、面積約8km<sup>2</sup>。海岸は海食崖の絶壁がほとんどで、わずか5カ所に漁船が接岸可能。1等灯台の都井岬灯台(灯高255m、光達37カイリ)のある岬端地域は、硬い砂岩が浸食に抗して残った部分。岬の基部は頁岩(砂岩を伴う)や頁岩砂岩互層が交互に分布している。これらは日南層群(古第三紀、四方十層層群)上部の岩石。なおお良火砕流(シラス・灰石)は市木・本城には分布するが都井岬は越えていない。小松ヶ丘(標高287m)、扇山(標高295.3m)、灯台高地(標高約250m)を結ぶ中央稜線から分布する小さい尾根の間に溪谷が刻まれ、岬をめぐる三方の海には13の小川が注ぐ。都井岬沖にはマカリ岩、黄金瀬をはじめ多くの岩礁が岬をとりまき、一帯は好釣り場になっている。岬周辺の水域は魚族が豊富で、原始的漁法によるトビ魚漁は有名。なお岬西方の岩礁トセンパイは玄武岩溶岩で注目される。岬は5.5km<sup>2</sup>が野生馬の生息地。岬の83%は樹林地で、そのうち75%は鉄肥杉。他はヒノキ、タケ、タブなど樹種は42。タブノキの葉やホウロクイチゴの茎や葉柄などは、下草などとともに冬の御崎馬(岬馬)の飼料となっている。→日南海岸 →串間市 →ミサキウマ →都井岬の植物

〈川中一蔵〉

( 宮崎県大百科事典 )

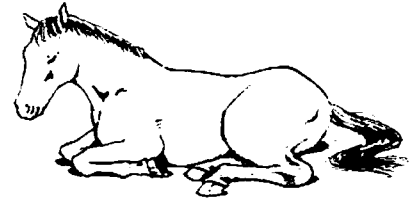
( 朝日新聞 )

## 折々のうま 大岡 信

先をゆく仔馬の尻の太り肉  
張りみちて双栗の実の光沢  
若山喜志子

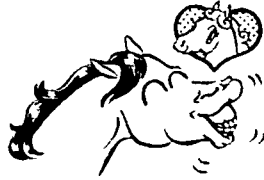
『歌壇』(昭三六)所収。喜志子生前最後の歌集。昭和二十六年(三十五年)の歌五百三十首を収める。昭和二十八年から三十年ごろまでは、静養のため故郷信州層ノ湯に滞在することが多かった。六十四歳から七十三歳まで、普通で言えば老境の歌にもかかわらず、この歌のように内側から突きあがる力によってみずみずしい作が多い。自分が歌に何を求めているかを知っている人の花実であらう。

注意しているとき



腹ばいで寝る馬の姿

### お馬さんは体で気持ちを教えてくれる



気分がいいとき



おこっているとき



### 農業博物館見学 - 清武小4年生のお便り -

清武小4年生130名は、平成5年5月14日に来館し、その感動を代表の小玉としみ君・丸岡鮎子さん・小松祐子さん達が感想文にして当館へお送り下さいました。

<p>あると思います。 また、はく物館に行くとお話を聞きたいです。 小松祐子より</p>	<p>象の頭の骨は人間の骨よりも何倍もありました。象の歯はひらべたくて、つるつるしてました。それとまだおなかの中にいた動物の赤ちゃんもありました。その時は、さすがに気持ちが悪かったです。まだ私の知らない事がたくさんあると思います。</p>	<p>象の頭の骨もありました。いろいろな物がたくさんありました。はく物館は、とても広くて、きれいです。知らない事はいっぱいあるなと思います。象の頭の骨は、びっくりしました。象の頭の骨は、びっくりしました。象の頭の骨は、びっくりしました。</p>	<p>「はく物館のみ」 この前の送足の時は、ありがたうございました。夕チヨウのひょう本やま、うりうやまのひょう本もありました。外国から、マクラン大やねこは、港や空こうでけんさをして、病気をもらって、いたらし、おんせし</p>
--	---	--	--

## //////////////////////////////////// 農業博物館だより //////////////////////////////////////

農業博物館もだんだんと落ち着いて、多くの来館者を迎えるようになりました。

平成5年度の入館者総数は 4,503 人(うち児童生徒約 500 人)でした。学外からは熊本県青年部、加治木高校PTA、日向老人クラブ他10団体、志布志高校、妻高校他 10 校、清武小学校、幼稚園、その他3校からの方々が訪れました。学内での利用は 2,703 人で、授業52回 ( 2,044 人)、会議16回( 187 人)、講演4回 ( 95 人)、機器の使用71回( 93 人)、公開講座3回 ( 150 人)、その他( 134 人)でした。

平成5年( 1993 ) 夏には”シリコン含浸動物標本”第1号が誕生しました。主な購入機器はNHKビデオ”地球環境はいま ”全 37 巻； 展示用パネル 5 組 除溼機( 10 /日)1台； オーバーヘッドプロジェクター (3M OHP) 1台などです。ご利用下さい。

### //////////////////////////////////// 平成5年度(1993) 農業博物館 //////////////////////////////////////

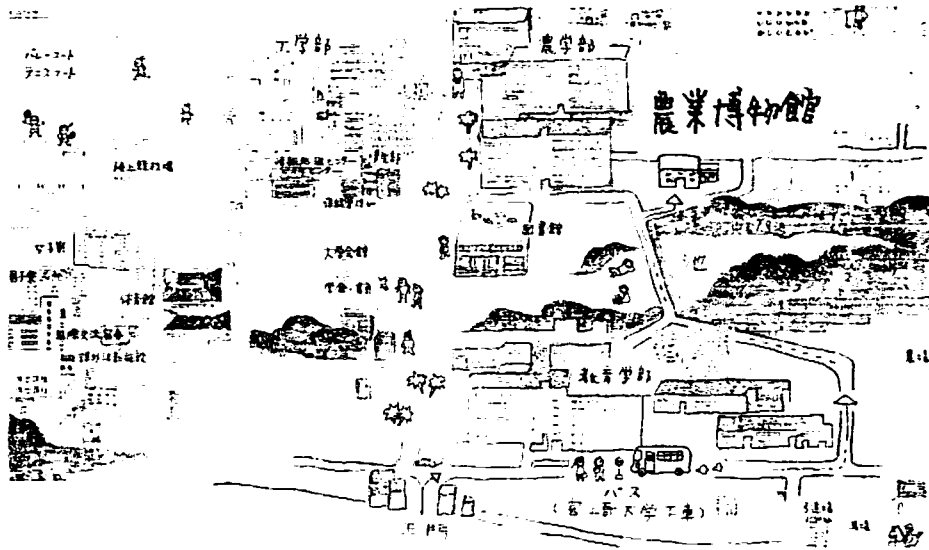
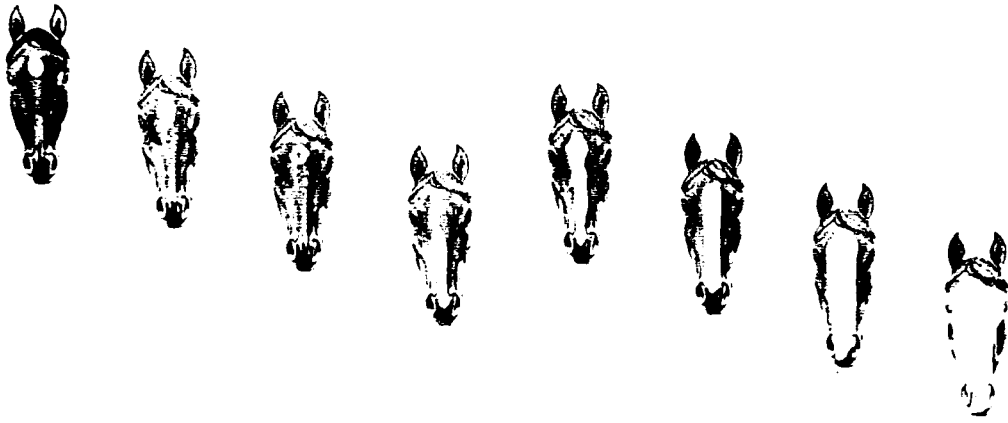
館長(併) 日高 敏郎      研究員(併) 藤原 宏志      事務補佐員 橋口 土喜子  
                              // (併) 日高 敏郎                   (非常勤)

#### 運営委員

藤原宏志(農林計画情報コース)      長友由隆(植物生産科学コース)  
中尾登志雄(森林科学コース)      御手洗正文(生産環境工学コース)  
太田一良 (生物工学コース)      武田 博(生物資源利用学コース)  
岩槻幸雄 (水族生産学コース)      佐藤衆介(家畜生産学コース)  
石井康之・井上達志(草地生産学コース) 那須哲夫(獣医学科)

### //////////////////////////////////// 編集後記 //////////////////////////////////////

- ☆      平成6年度( 1994 )の特別企画展示には、日向の国・宮崎の宝”御崎馬”をテーマに選び、第35回科学技術週間を迎えました。天然の大自然に恵まれた都井の里へと足を運ぶきっかけになれば幸いです。
- ☆      日本馬事協会 (東京都) には馬パネルの貸与とパンフレットを沢山頂きました。馬の博物館(横浜市)や串間市からも貴重な資料を一概頂きました。共に厚く御礼申し上げます。  
また、ニュースの編集にはいろいろの本やパンフレットを活用させて頂きありがとうございました。
- ☆      農業博物館は間もなく創立60周年を迎えます。創立以来の沢山の貴重な資料など今後大いに活用し、さらに新時代の博物館にふさわしい機能の充実へ努めたいと思います。      (日高 敏郎)



農業博物館は右上の方角(西) 池のほとりです

開館日 月～金・9時～16時  
 無料です  
 科学技術週間  
 大学開放日(11月)

休館日 土・日・祝祭日・年末年始  
 本学の指定日

交通 宮崎交通バス  
 宮崎大学下車5分

農業博物館ニュース NO.15  
 平成6年(1994)4月18日発行

宮崎大学農学部農業博物館  
 〒 889-21 宮崎市学園木花台西1-1  
 TEL 0985-58-2811  
 FAX 0985-58-2884